経済史

経済史部門は経済史 A，経済史 B，経済史 C の 3 つの分野から構成されている。それぞれ西洋経済史，東洋経済史，日本経済史に対応しているが，A，B，C と区分してあるのは，相互に他の分野と統合し，たとえば「産業革命」というテーマで西洋経済史と日本経済史が統一するかたちで講義することができるよう，教育的融通性を確保しておくためである。また，経済史 B（東洋経済史）という科目が伝統的に存在していることは，本学経済史のひとつの特徴である。アジア史の中の一環としての日本史，「ヨーロッパ中心史観」からの脱却など，日本，ヨーロッパを相対化する思想がその背後にある。

学部教育科目としては，以上の経済史 A，B，C のほかに，主として 1，2 年生を対象とした「経済史入門」がある。経済史部門の教員全員がローテーションで担当している。講義内容は，各国史の概要を講述するなかで，史料の取り扱い方や歴史的構想力の大切さを教示したり，経済史分析の方法論（マルクス主義，数量経済史，生態史観，社会史，実証主義）を教示するなど，さまざまである。

学部・大学院共通科目としては，「現代経済史」，「比較経済史」，「文明史」がある。「現代経済史」は多様な講述内容をとっているが，煎じつめれば，「現代とは何か」を歴史的なパースペクティヴで明らかにすることを狙いとしている。「比較経済史」は「経済史入門」と同様，経済史部門の教員全員がローテーションで担当するコア科目である。文字どおり各国経済史を比較し講述する科目であるが，比較をとおして世界史認識の眼を養うことが目的である。「文明史」は，経済に限定することなく，特定の国・地域の歴史的構造を文明論的視点から総体的に把握することを目的としている。

大学院講義科目としては，「西洋経済史」，「東洋経済史」，「日本経済史」がある。ここでは，当該経済史の特殊かつ重要な問題を集中的に講義することを目的としている。

総じて，本学経済史の特徴は，史料の解読，分析に基礎をおいた実証的歴史教育と，比較経済史や文明史にみられるような，理論的・歴史的構想力を養う教育の双方を重視している点にあると言えよう。